



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeikib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

『盲文画話』が載す生業

世の移り替わる(の激しさよ)。淵は瀬となる飛鳥川。昨日今日と仇に過ぎゆく年月の、弓張腰の矢よりもはやく。宝暦二申年(一七五二)に生まれて文政(一八一八)三〇の今は早七十有余年……。の書き出しではじまる『盲文画話』の叙は、四、五歳頃からの見聞したもののうち、文政にはなくなった、四時の物売りや風流仕出しの商人等を思い出すまま書いていたら、思いのほか沢山あった。

これは病床に伏せている間の徒然なるままに、日暮らし硯に向かつて書きためたものである。話だけでは退屈する子供たちでも絵に描いたら興味が湧くかも知れないと思い、下手ながら署がしたものである。と。

文政十年(一八二七)とあるから 著者水野廬朝七十五六歳の時に描かれたものである。

右書が描かれてすでに二百 自分の背丈程の格子戸の荷年。当事の子供以上にわから 箱へ連雀を附け、その荷箱ないものも増えた。その中か の上に四角に包んだ木綿地ら、これまで載せたことのないものをいくつも段々に積み重ね、いものを選び、解説文とともに 木綿の高さが七八尺(二一〇)に紹介する。

高荷の本綿売 天明(一七八一)八九から 寛政(二七八九)一八〇二頃 手拭いを下げる。これを背に掛けてあった。

高荷の本綿売



抜けるバランス感覚や屋敷の 花火線香売

の小門を自由にぐるぐる腰の 曲尺合と見える。風俗は尻 十二三、或いは私五歳くら

を端折らず、裾を高く抱え 上げ、前帯脚絆、腰に物指 箱を襟に掛け、長い花火

しと裁ち小刀を提げる。売 声は、モウメンヤモウメン 箱へ入れて「はなびせん と呼んだ。これも今はない。

いた享和頃には止んで今 はない。

花火線香売

扇地紙売

扇地紙売

紙帳売



寛政から享和の頃まで、 夏に売り歩いていた。色々 間に四角い台に紐紐をつけ、

な模様を描いた地紙を、扇 形を下は子へ積み重ね入れ 乗せ「しちようしちよう」

下げていた。即席折りの道具 箱を中程へ納め、馬の押し 掛けで立派に中結した房を

下げていた。小鱈の飾売りのように型 上げ、「扇地紙」と呼び歩い

ていた。風体は縮の帷子、 浴衣、当世帯、印籠などを 売つてはいけなかつたと思

骨扇をかざし、足袋雪駄で 買って「即座に折を貼る合 った。今絶えてなし。のこと。



紅白粉油元結い売



近頃まで、紅、白粉、油、 元結、楊枝、齒磨類、背負 箱に入て、風呂敷にて背負、 元結油と呼びて売来る。鬘付 け油などは代料ほどづつ、剃 刀にて切りて売る。此商宝暦 明和までは、美男かづらにて 髪結い者もありし。所々の香 具店の看板の上にも、此のか づら一二把出し有りしが、早 昔となりけり。

最近まで、紅、白粉(中略) 齒磨類は、背負い箱にいれ、 その上から風呂敷に包み、 「もとゆひ あぶら」と売り 声を上げながら来ていた。鬘 付け油などは、客のいう料金 分ずつを、剃刀で切るように 当てながら売つていた。

この商いは明和(一七六四) 七二頃までは、美男鬘(前 髪に残る若者用髪形に髪を 結つていたり、店の看板にも 若衆鬘に結つたものもあつた が、いつの間にか見なくなつ た(親父髪ばかりになった)。

地張煙管売

是も昔より近き頃まで背負 荷にて売来たりしが、近年す きと止て、らうのすげ替のみ